

# まごころだより

納涼祭特集

2018. 10月号



ちょうど100年前、魚津が発祥の地と言われている「米騒動」が起こり、米騒動に関するイベントがあちこちで行われています。米騒動のあった年は豊作であったにもかかわらず米の値段は倍近くに上がっていました。『米価高騰の原因は、軍用米の需要を見こした地主や豪商が米を買占め、船で市外に積み出しているからだ。このままいくと、価格は高騰し続け自分たちは米を買えなくなってしまう。船積みを止めよう。子供たちにご飯を食べさせたい』と漁師の妻たちはやむに已まれぬ気持ちで行動を起こしました。それは目の前にいる子供にご飯を食べさせたい一念から出た行動でした。「米騒動」と言われているけれど、騒動や暴動を起こそうとか、政府を転覆させようとか、救済対策や制度を要求するとかそんな気持ちで取った行動ではなかったのです。お腹を空かせた子供にご飯を食べさせたい、その一念だったのです。



富山型デイサービスの始まりは米騒動と同じで、目の前のこの人をなんとかしたいという思いから始まりました。『なんで家に帰れないのか。自分の家で過ごしたい。自分の家で最期を迎えたい』と涙を流す年老いた患者を見た3人の看護師が何とかしたいと、病院を辞め「このゆ

びと一まれ」を開設しました。当時はまだ介護保険制度が出来る前、公的補助も支援もなく、数年間は経済的にも大変だったと聞いています。そんな中、施設を存続させるために、市や県に掛け合い続け、なかなか理解してくれない役人を前に怒鳴り、泣いたこともあったと聞きます。組織も強大なバックもなく、根回しも出来ない普通の市民が役所に掛け合っても役所は動いてくれません。しかし次第に仲間が増え、活動が認められ、県が動き、国も動き、25年たった今年、国はやっと富山型の根本理念である「共生」を認め、制度化するまでになりました。制度があるからやるのではない。施設を作りたいからやるのではない。目の前になんとかしたいと思う人がいるから、何とかしないと大変なことになる人がいるから動くのです。

制度は後からついてきた。それが富山型です。



ある団体からこんなチラシが送られてきました。

『惣万さんたちが始めた「富山型ケア」と呼ばれる全く新たな取り組みは、25年を経て全国に広がりました。国家もその成果を認め、「共生」と呼ばれる事業を新たな制度として認め、今年度からスタートさせています。一方で、国家は財源不足を理由に、この間、介護保険の縮減をすすめ、公的保障をさらに後退させてきました。そこに登場させたのが「我が事 丸ごと」地域共生社会です。

「富山型ケア」が目指したのは、病院や大規模施設ではなく、家族をはじめ地域での親密な関係の中で老いを支えることであり、それは誰かに指示されることではなく、人々の自発的な志や共感であったからこそ拡がり、制度を変えてきたと思います。その理念や実践までもを包摂し、国家は「社会構想」として規定しなおし、私たちに押し付けようとしているのではないのでしょうか？』

確かに国は財政難の解決方法として、地域でお互いに支えあいましょうと介護を地域に押し付けてきたのかもしれない。「富山型」の理念は国にとって渡りに船だったのかもしれない。そんな国の思いに利用されているのか。「富山型」はこれからどうなっていくのか、とこの団体の人たちは危惧しているのでしょう。





どこの社会にもいつの時代にも人の善意や好意を利用してうまく立ち回るずるい人間はいるものです。もしかすると富山型の活動を認め共生を制度化した裏には国のずるい考えが潜んでいるのかもしれませんが。しかし、だからと言って目の前の困っている人を見捨てることはできません。政府のずるい考えに加担することになるからといって、困っている人を見捨てることはできないのです。

今、まごころは地域とのつながりを求めています。高齢化する地域の拠点になろうと分家を中心とした活動を広げています。多くの人が最期まで住み慣れた地域で過ごすためには、日常的な地域のはつながりは不可欠です。隣の人がどんな人かも分からないのに、声を掛けたり、お手伝いしたりするのは難しいものです。認知症の人と接したことがなければ、どう声を掛けたらいいのかわかりません。顔馴染みで多少なりとも気心が知れた間柄だから、何かあったときには、声を掛け合い、支えあうことができるのです。それが国のずるい思惑であろうとなかろうと、地域で手をつなぎ、困ったときは「お互い様」と助け合える関係を作り上げていかなければ、私たちは生き延びていけないのです。

2020年東京オリンピックからわずか5年後の2025年には3人に1人は65歳以上、5人に1人は75歳以上、10人に1人は認知症状があるそんな時代がやってくるのです。オリンピックに浮かれている話ではないように思います。多くの人が在宅を望んでいるにもかかわらずかなえられない現実があります。衣食は足りているけれど、寂しい思いをしている高齢者は沢山います。残された時間を心穏やかに満たされた気持ちで過ごしてもらいたい。私も満たされた気持ちで最期まで住み慣れた地域で過ごしたい。そして「生きていてよかった」と思える最期を迎えたいと思っています。

福岡県にある、通って・泊まって・住める介護施設「宅老所よりあい」は理念として次のようなことをあげています。

「食べ物は普通の家庭料理をみんなで食べたい。おむつは嫌だ、トイレを使いたい。頼みもしないリハビリなんかしたくない。誰かがつくった勝手な時間割で自分の生活を乱されたくない。それより昼寝を楽しみ、お菓子を食べて、昔話に花を咲かせ、天気の良い日はぶらりと外に出て季節を感じたい。そして住み慣れた町で最期まで暮らしたい。見知らぬ場所で寂しく死ぬより、顔見知りの人が沢山いる落ち着いた場所で穏やかに寿命を迎えたい。」

今必要なことは『認知症にならないために』から『認知症になっても安心して暮らせる町づくり』への発想の転換だと思います。



小物づくりでできた紙バッグ

### 10月行事のご案内

- |         |                 |
|---------|-----------------|
| 3日 (水)  | かわいい・きれいな小物づくり  |
| 6日 (土)  | ハーモニカ伴奏でうたいましょう |
| 11日 (木) | ピアノに合わせて歌いましょう  |
| 15日 (月) | 林夫妻の歌謡ショー       |
| 19日 (金) | 惣菜またはお菓子づくり     |
| 31日 (水) | おしゃべり・にぎやか食事会   |





地域の方と楽しく歓談



子どもたちの楽しい食事風景





利用者合唱団



ご近所の協力をいただきました



子どもたちの飛び入り参加



真剣なまなざしで紙芝居を鑑賞



負けじとご婦人方も



希望の方に差し上げます

